

# 泥かぶら

『少年A退院、子供、幼児のいじめ、虐待、そして殺害の報道が絶えません。そんな中での少年の仮退院、様々な意見が言われています。「まだまだ早い」「これからどうするんだ。家族は、兄弟は最近、特にバブルがはじけ、不景気になってきた一九九〇年ころより顕著になってきたようです。好景気の頃は隠されてきたものが、不景気とともに噴き出しているようです。努力すれば報われる社会は好景気の頃でした。今はどんなに努力しても、リストラ、倒産、そして家庭崩壊等、生きずらい世の中です。しかも努力しても結果が出なければ努力とは呼ばない社会なのです。

結果が出ない努力もこの社会にはあるのです。あるプロ野球の投手がいっています。【ピンチの時内野手が集まって「がんばれ」と声をかけられると、俺は精一杯がんばっていると言つてやりたい】と。努力が報われる社会も大切ですが、努力を認める社会であれば、まだ救いがあり、よいと思うのですが・・・。新制作座という劇団で一九五三年の初演より今もロングランの全国公演が続いている演劇で『泥かぶら』というのがあります。「泥かぶら」とは主人公の女の子のあだ名です。『昔ある村に、みなしこの女の子がありました。あまりにも身なりが汚く、顔も泥で汚れておりましたので村の子供たちがからかい「泥かぶら」と呼んで、唾を吐きかけたり、石を投げたりいじめておりました。しかしこの「泥かぶら」の女の子も負けず嫌いで気が強く、村の子供に仕返しをします。そうしますとますます孤立化してしまい、ひとりぼっちになってしまいます。そして「自分はこれからどうしたらいいのか」夕日を見ながら悲しくなり考へ込んでしまいます。そこに一人の僧が通りかかり次の言葉を与えます。

「三つのことを守れば村一番の美人になれる。それは自分の顔を恥じないこと、どんなときにも二ツコリ笑うこと、そして他人の身になつて思うことだ」と。その後この「泥かぶら」この約束を守り通して生きていきます。庄屋の子が父親の大ことにしている茶器を割つたのを自分が割つたと助けてあげたり、ひと買いに売られる女の子の身代わりになつたりと、犠牲的な行為をいやな顔ひとつせず為していきます。いよいよ都に売られて行く道すがら、何の屈託もなく「何を見ても素晴らしいし、何を食べてもおいしい」と無邪気にいう泥かぶらに、ひと買いの次郎兵衛はいたたまれなくなり、詫び状を残して逃げてしまいます。その詫び状には『おまえのおかげで、私の体の中についた仏心が目覚めた。泥かぶらよ、おまえは仏の子だ。幸せになつてくれよ』とありました。このときから泥かぶらの泥は金泥に変じたと言つことです』

こんな「泥かぶら」に本当の美しさ優しさを思います。そして他人の心を突き動かすものが何であるのかを教えられることです